

岡崎密乗 撰文

## 「岡田鴨里伝」 翻刻

明治維新の興業は元より我皇祖皇宗の御遺徳と明

治聖天子の御稜威然らしめたるところに因ると雖も亦以て之を翼賛し奉つたる忠臣義士勲勞を多大なりと

せざるべからず。徳川幕府昌平三百年国民徒らに和平の夢を貪り只將軍大名あるを知て上に天子の在すを忘れたるの時に当り、皇室の式微を嘆て勤王の大義を唱へ東に攘夷を論じ、西に尊王を説き同志相助け義氣相通じ以て維新の氣運を促進したるもの実に当時の志士

勤王家にして我偉人の岡田鴨里の如き亦其一人なり。

岡田先生、名は僑、字は周輔、号を鴨里と云ふ。文化三年（紀元二四六六）津名郡中田村の内王子組に生る。

里正砂川佐一郎氏第四子なり。出でて三原郡榎列村掃守組岡田家を嗣ぐ。天資慧敏幼にして学を好み文を愛す。二十餘歳にして笈を負ひて京師に遊び頼山陽に師事すること多年刻苦精勵汎く群書を涉獵し深思明弁能く師の卓識を伝ふ。

実に山陽第一の高弟たり。山陽日本外史及政記を著すや主として其校讎に参与し以て師業を援くること尠なからず。鴨里の著に外史補あり。元龜天正の間英雄割拠の史跡を論述したるものにして戦国十四将

治乱興廢の蹟歴然たり。是れ外史の足らざる処を補

ひ述べざる処を加えたるものにして、拮据編纂二十年を閲したりと云ふ。嘉永三年八月、稿成り上梓す。抑も外史は山陽忠誠慷慨の筆に成りたるものにして

或は皇室の式微を慨して武家專横の非を論じ、或は忠臣義士を論賞して不逞不忠を筆誅す。其時人を感起せしめ後世を誘掖する。誠に大なるものあり。鴨里の外史補に於けるや、北畠氏に始まりて蒲生氏に終る。各氏の下に痛切なる論評を加へ正邪得失論悉せざる処なし。殊に其北畠氏の

一族が終始忠勤に励み能く南朝擁護の奉公を全くしたることを叙せるが如き実に著者忠君の赤誠を披瀝したるものにして読むものをして肉躍り血沸くの慨あらしむ。外史を読むもの当に次を参照すべき也。

又名節録の著あり。曰く「名節は道の藩籬なり、家に藩籬有りて以て資財を護るべく名節の士有を綱常を維持すべし」と。当時士道衰替し徒に率功を矜りて利を争ひ難に臨みて苟も免れ廉恥を忘れ節操を失ふに至る。名節録の録する処、七十有餘人皆忠誠の士にあらずんば節義の士なり。一々詳論を加へて世の祿を懐ひ安を偷み靦顔恥づるなき者を戒めらん。名節を重んずるの儒者にあらずんば豈能く此著あらんや。書の刊行せらるるや維新前後学生志士喜んで之を読み其書大に行はる。

草莽私記は一篇の幕末史とも称すべく嘉永六年米

国使節ペルリ浦賀に來りて通音貿易を請ふに  
始まり慶応二年十二月孝明天皇の崩御に至りて  
筆を止めたり。其間の事歴を詳述し其關係を明示す。筆力雄  
渾にして当時尊王攘夷の論議之に依りて知るべく藩  
論の仰背之によりて窺ひ得べし。仙台の士 岡鹿門  
(千仞)其攘夷史を著すや考證を多く此書に取りたる  
と云ふ。

五倫説は君臣父子夫婦兄弟朋友の道を叙述したるもの  
にして引證挙例諒々として細説之れつとむ。亦以て通俗  
倫理談叢として社会教育資料の好著なり。

鴨里文久元年九月藩主蜂須賀侯の知る処とな  
り召されて中小性となり更に洲本学問所教授に任  
ぜられて居を津名郡洲本町に移す。抑も洲本学問所  
は寛政十年蜂須賀侯の創設する処にして中田謙齋  
藤江石亭等此所に講を筵き淡路学海の祖となれり。

繼で那波網川・中田南洋・牛尾桃林等の諸儒輩  
出せり。鴨里の教授となるや、徒らに死書の講読に力めず常  
に国体を説きて国士の覚醒を促し、皇室の学敵く唱  
へての尽忠の志気を養ふ。弟子之に化し藩士其風を習  
ふ後は淡路より出でたる学者志士を多く此門に出つ。即ち

元名東県権中属久保田信平、元神崎郡長

倉本雄三、元神戸師範学校教諭、原口泰緑綬

褒章佩用者仲野理一郎等皆門下生たり。

当時蜂須賀家は徳川幕府と親戚の關係あり

動もすれば藩論佐幕に傾かんとす鴨里此間に処して屢  
順逆の大義を説き、或は藩士を説得し、或は藩侯に建  
白し苦心奔走、終に徳島藩をして能く姻戚の私情  
を捨てて勤王の大義を守らしむる事を得たり。鴨里の如き  
一代の碩儒にして徳望藩内に汎く識見非凡にして忠  
節の士にあらざんば豈能く是の如きことを得んや。

鴨里毎々藩侯に仕えて献替の誠を致す。其命によりて藩  
制の改革を計り闔藩の儉約を励行して国力の

充実を企画する等凡儒の敢て及ばざる所あり。『蜂須  
賀家譜』一卷は藩侯の命によりて編纂したるものにし  
て以て如何に藩主の信任厚かりしかを知るに足るらん

鴨里常に勤王の志士と相往来し藤本鉄石・古東  
領左衛門、森田謙蔵等と時事を談じ意気投合

す。其他儒者碩学塩谷岩陰・牧雪齋・後藤松  
陰・草場佩川・沢村西坡・林鶴梁等と交わり屢  
々京阪の間に応酬す。

鴨里文集あり。文章流暢にして明快犀利なる史  
眼を以て縦横の論断を下す。当時文名噴々師山陽と  
併せ称せらる。山陽病篤く自ら其起つ能はざるを知るや、

鴨里を枕辺に招き託するに後事を以てし自贊の肖  
像を与ふ。師弟の情誼の濃きこと斯の如きものあり。其家

を治むる整齋、人々に按ずること謹嚴苟くもせず学究  
深く徳風高し。明治十三年九月五日、病を以て歿す。

享年七十五、碑文は鴨里の自撰に係る。之を読まば以

て其性向関歴を知るに足るべし。

大正四年十一月十日

今上陛下御即位の大札を行はせ給ふに当り特に生前の勲勞を思し召され従五位を追贈し玉ふ。靈當に地下に瞑すべし。

鴨里の孫 榎列村掃守に住し岡田和三郎として徳望一郷に高く頗る祖父の風あり。

#### 岡田鴨里碑文

岡田鴨里名僑字周輔津名郡王子村里正砂川佐一郎第四子也出繼岡田氏住三原郡掃守村文久元年九月 藩公召為中小性任洲本文学教授徙洲本明治元年閏四月命与参政事五月以病致仕二年正月命列参政兼学校懸准物頭席九月命病間出与聴参事之議三年五月免十一年九月帰住掃守村十三年九月五日以病歿葬木戸池上山享年七十五

#### 書き下し文

明治維新の興業は、元より我が皇祖皇宗の御遺徳と明治聖天子の御稜威然らしめたる所に因ると雖も、亦以て之を翼賛し奉りたる忠臣義士勲勞を多大なりとせざるべからず。徳川幕府昌平三百年、国民徒らに和平の夢を貪り、只將軍大名あるを知りて、上に天子の在すを忘れたるの時に当り、皇室の式微を嘆きて勤王の大義を唱へ、東に攘夷を論じ、西に尊王を説き同志相助け義氣相通じ、以て維新の氣運を促進したるもの、実に当時の志士勤王家にして我が偉人の岡田鴨里の如き、亦其の一人なり。

岡田先生、名は僑、字は周輔、号を鴨里と云ふ。文化三年（1806）津名郡中田村の内、王子組に生る。里正砂川佐一郎氏の第四子なり。出でて三原郡榎列村掃守組岡田家を嗣ぐ。天資慧敏、幼にして学を好み文を愛す。二十餘歳にして笈を負ひて京師に遊び、頼山陽に師事すること多年、刻苦精励、汎く群書を涉獵し、深思明弁能く師の卓識を伝ふ。実に山陽第一の高弟たり。山陽『日本外史』及び『政記』を著すや、主として其の校讎に参与し、以て師業を援くること尠なからず。

鴨里の著に『外史補』あり。元龜・天正の間、英雄割拠の史跡を論述したるものにして、戦国十四将治乱興廢の蹟歴然たり。是『外史』の足らざる處を補ひ述べる處を加えたるものにして、拮据編纂二十年を閲したりと云ふ。嘉永三年（1850）八月、稿成り上梓す。抑も外史は山陽忠誠慷慨の筆に成りたるものにして、或は皇室の式微を慨して、武家専横の非を論じ、或は忠臣義士を論賞して、不逞不忠を筆誅す。其の時人を感起せしめ、後世

を誘掖する、誠に大なるものあり。鴨里の『外史補』に於けるや、

北畠氏に始まりて蒲生氏に終る。各氏の下に痛切なる論評を加へ、正邪得失論悉せざる処なし。殊に其北畠氏の一族が終始忠勤に励み、能く南朝擁護の奉公を全くしたることを叙せるが如き、実に著者忠君の赤誠を披瀝したるものにして、読むものをして肉躍り血沸くの慨あらしむ。『外史』を読むもの次に次を参照すべき也。又『名節録』の著あり。曰く「名節は道の藩籬なり。家に藩籬有りて以て資財を護るべく、名節の士有を綱常を維持すべし」と。

当時士道衰替し、徒に率功を矜りて利を争ひ難に臨みて苟も免れ、廉恥を忘れ節操を失ふに至る。『名節録』の録する処、七十有餘人皆忠誠の士にあらずんば節義の士なり。一々詳論を加へて世の祿を懐ひ、安を偷み靦顏恥づるなき者を戒めらん。名節を重んずるの儒者にあらずんば、豈に能く此の著あらんや。書の刊行せらるるや、維新前後、学生志士喜んで之を読み、其の書大に行はる。

『草莽私記』は一篇の幕末史とも称すべく、嘉永六年（1853）米国使節ペルリ浦賀に來りて、通音貿易を請ふに始まり、慶応二年（1866）十二月、孝明天皇の崩御に至りて筆を止めた。其の間の事歴を詳述し、其の関係を明示す。筆力雄渾にして当時尊王攘夷の論議之に依りて知るべく、藩論の仰背之によりて窺ひ得べし。仙台の士岡鹿門（千仞）、其の『攘夷史』を著すや、考證を多く此の書に取りたると云ふ。

『五倫説』は君臣父子夫婦兄弟朋友の道を叙述したるものにして、引證举例諒々として細説之つとむ。亦以て通俗倫理談叢と

して社会教育資料の好著なり。

鴨里、文久元年（1861）九月、藩主蜂須賀侯の知る処となり、召されて中小性となり、更に洲本学問所教授に任ぜられて、居を津名郡洲本町に移す。抑も洲本学問所は寛政十年（1798）蜂須賀侯の創設する処にして、中田謙斎・藤江石亭等、此所に講を筵ぎ、淡路学海の祖となれり。

繼で那波網川・中田南洋・牛尾桃林等の諸儒輩出せり。鴨里の教授となるや、徒らに死書の講読に力めず、常に国体を説きて国士の覚醒を促し、皇室の学敵く唱へて尽忠の志気を養ふ。弟子之に化し藩士其の風を習ふ後は、淡路より出でたる学者志士を多く此の門に出づ。即ち元名東県権中属久保田信平、元神崎郡長倉本雄三、元神戸師範学校教諭原口泰、緑綬褒章佩用者仲野理一郎等、皆門下生たり。

当時蜂須賀家は徳川幕府と親戚の関係あり。動もすれば藩論佐幕に傾かんとす。鴨里此の間に処して屢順逆の大義を説き、或は藩士を説得し、或は藩侯に建白し苦心奔走、終に徳島藩をして能く姻戚の私情を捨てて勤王の大義を守らしむる事を得たり。鴨里の如き一代の碩儒にして、徳望藩内に汎く識見非凡にして忠節の士にあらずんば、豈に能く是の如きことを得んや。鴨里毎々藩侯に仕えて献替の誠を致す。其の命によりて藩制の改革を計り、闔藩の儉約を励行して国力の充実を企画する等、凡儒の敢て及ばざる所あり。『蜂須賀家譜』一卷は藩侯の命によりて編纂したるものにして、以て如何に藩主の信任厚かりしかを知るに足らん。

鴨里、常に勤王の志士と相往来し、藤本鉄石・古東領左衛門・

森田謙蔵等と時事を談じ、意気投合す。其の他儒者碩学 塩谷  
宕陰・牧雪斎・後藤松陰・草場佩川・澤村西坡・林鶴梁 等と交  
わり屢々京阪の間に応酬す。

『鴨里文集』あり。文章流暢にして明快犀利なる史眼を以て  
縦横の論断を下す。当時文名噴々、師 山陽と併せ称せらる。

山陽 病篤く自ら其の起つ能はざるを知るや、鴨里を枕辺に招き  
託するに後事を以てし、自賛の肖像を与ふ。師弟の情誼の濃きこ  
と斯の如きものあり。

其の家を治むるに整斎、人々に按ずること謹嚴 苟くもせず学  
究深く徳風高し。

明治十三年（1880）九月五日、病を以て歿す。享年七十五、  
碑文は鴨里の自撰に係る。之を読まば以て其の性向閑歴を知るに  
足るべし。

大正四年（1915）十一月十日、今上陛下御即位の大札を行  
はせ給ふに当り、特に生前の勲勞を思し召され、従五位を追贈し  
玉ふ。靈当に地下に瞑すべし。

鴨里の孫 榎列村掃守に住し、岡田和三郎と云ふ。徳望一郷に  
高く頗る祖父の風あり。

#### 岡田鴨里碑文

岡田鴨里名僑字周輔津名郡王子村里正砂川佐一郎第四子  
也出繼岡田氏住三原郡掃守村文久元年九月 藩公召為中  
小性任洲本文学教授徙洲本明治元年閏四月命与参政事五  
月以病致仕二年正月命列参政兼学校懸准物頭席九月命病

間出与聴参事之議三年五月免十一年九月帰住掃守村十三  
年九月五日以病歿葬木戸池上山享年七十五

#### 注

- ・式微・・・はなはだしく衰えること。
- ・里正・・・庄屋。村長。
- ・校讎・・・文章や字句を比較照合して誤りをただすこと。校正。
- ・靦面・・・面と向かうこと。まのあたりに見ること。
- ・通音・・・手紙のやりとりをすること。
- ・北畠親房・・・永仁一（文和三）正平九（一二九三）一三五四（  
鎌倉末・南北朝時代の公卿・思想家・歴史家。師重の長子。母は  
藤原隆重の娘。官は正安二年（1300）の兵部権大輔を振り出  
しに左少弁・参議・権中納言・権大納言兼按察使などを歴任し、  
元徳二（1330）年に出家したのちも南朝から准大臣、准三宮  
の宣下を受ける。村上源氏中院流の出で、晩年は中院准后と呼  
ばれた。後醍醐天皇の信任厚く、吉田定房・万里小路宣房と共  
に「後三房」と称された。養育を任されていた世良親王の死去  
により出家している。ここまでの事蹟は宮中故実・学識に限ら  
れ、後醍醐の建武新政後、諸国流寓中が親房の眞の活躍期であ  
る。正慶二（元弘三年）（1333）六月に天皇が還京して新政府が  
成立すると、翌々月、子の頭家は陸奥守に任ぜられ、義良親王（後  
村上天皇）を頂く陸奥国府（小幕府）が成立。同十月、親房は頭家  
と共に多賀城に下向し、奥羽経営の実権を握った。建武二年（1  
335）冬、足利尊氏が鎌倉で背くと直ちに上京し、翌年一月の

天皇の山門行幸に供奉、父を追って上洛した顕家は尊氏の西下後陸奥へ帰るが、親房は京に残り、湊川合戦のち室町幕府が成立すると次男顕信と共に伊勢へ下って抵抗の拠点づくりに着手した。同年末に吉野へ脱出した後醍醐と呼応して幕府打倒の方策を巡らし、暦応一（延元三年）（1338）九月、義良・宗良両親王を奉じて結城宗広らと伊勢大湊を出帆、常陸の諸城を転々としながら南朝の勢力回復を図るが、頼みの結城親朝が幕府側に寝返ったため、康永二（興国四年）（1343）吉野に戻る。この間に後醍醐が没して南朝の中枢となり、観応の擾乱で顕著となった幕府側の分裂で文和一（正平七）（1352）年閏二月、十六年ぶりに入京するが、南朝の頽勢は覆せず賀名生に没した。謀略家であったが幕府との交渉は柔軟性を欠き、南軍の不利を決定的にしたことは否定できない。常陸滞在中に著した『神皇正統記』は、形勢を観望する武士たちの説得に天皇家の絶対性を主張したものの、のち、後村上天皇に献ぜられて帝王学の書とされ、後世には歴史書として広く読まれた。

・赤誠・・・少しもうそや偽りのない心。ひたすら真心をもって接する心。

・藩籬・・・垣根。かこい。転じて、へだてとなるもの。

・綱常・・・「綱」は三綱、「常」は五常。人の踏み行うべき道。

・岡千仞・・・天保四（大正二）（1833）（1914）八十一歳。

仙台の人。初名は修、字は振衣、号は鹿門。二十歳で江戸に行き昌平黌で佐藤一斎・安積良斎に学び、重野成斎・中村敬宇らと交わった。大阪に私塾を開き尊攘派として時局を論じたが、

幕府の忌むところとなり一時下獄した。維新後は東京に移り大学等で教授し米仏の国情紹介などに勤め、東京図書館長となる。さらに私塾「緩猷堂」を開き多くの門人を育てた。明治十七年（1884）には楊守敬と中国へ同行し、一年間中国の文人と交友した。

・中田謙斎・・・宝暦八（享和一）（1758）（1801）四十四歳。淡路洲本の人。幼少より学を好み、初め仲道斎に学び、後に尾張の細井平洲に従学した。学成って帰郷し、公務の傍ら子弟に教授していたが、寛政十年（1798）藩は洲本学問所を創設し、藤江石亭と共に教官として抜擢し、謙斎に学館を統督させた。しかし在職四年で病歿した。子に南洋がいる。

・藤江石亭・・・寛保一（文化十二）（1741）（1815）七十五歳。淡路洲本の人。名は秀、また伴勝、字は子文、通称は斧助。藩の銃卒勝乗の長男、先祖は播磨の人。徳島の仲道斎の門人で、もと藩の銃卒であったが、寛政十年（1798）に洲本学問所開設とともに中田謙斎と共に教官に擢んでられる。詩書を善くし、龍草廬の幽蘭社と交流があり『麗沢詩集』に漢詩を留めている。謙斎の姉妹を娶り甥に中田南洋がいる。

・那波網川・・・宝暦七（文化十）（1757）（1813）五十七歳。播磨網干（姫路市）の人。名は積、字は世勲、通称は大助・与蔵。永田孫右衛門直道の四男。佐々木を名のる。若年で京都に出て芥川丹邱に学ぶ。のち那波魯堂の門人となり、魯堂が徳島に招聘されるのに随行した。魯堂の没後、男子がなかったので推されて師の娘貞と結婚し家督を相続した。寛政四年（17

92)、寺島学問所の文学教授になり、享和二年(1802)、洲本学問所の文学教授に転じ、居を洲本に移した。

- ・中田南洋・・・天明八く安政六(1778く1859)七十二歳。淡路洲本の生まれ。名は同・同之、字は琇、通称は観吉、別号は履堂・孟浪子。中田謙斎の次男。洲本馬場町に「履堂書屋」を開いて朱子学を講じた。嘉永四年(1851)中小姓格を以て洲本学問所教授となり後に大小姓格となった。門下から橋本晩翠・沼田存庵が出た。養子の蓮溪も明治二年(1869)に文学教授となり、廃藩後は小中学校の教育に従事した。
- ・牛尾桃林・・・く明治六(1873)

淡路洲本紺屋町の人。名は茂助・茂介・藻介、別号は退山・以直。福良の山口睦斎、洲本の中田謙斎・藤江石亭に師事し、和漢の学に通じ、洲本学問所の素読方を勤めていた。嘉永四年(1851)御用方を熱心に勤めたので、小奉行格・学問所助講となった。安政一年(1854)洲本沖合に異国船を見て由良港に出張した。漢学のほか、和歌・俳句・画・賃児芝居の脚本も書いた。墓は神光寺にある。

- ・久保田信平・・・天保三く明治九(1832く76)四十五歳。淡路出身。号は南里。幕末明治時代の国学者。森田節斎に儒学を、大國隆正に国学を、藤本鉄石に絵画を学び、家塾を開く。明治に入り、名東県権中属、第十一大区区长、洲本支庁長などを勤めた。

- ・倉本雄三・・・文化十一く明治二十七(1814く94)八十一歳。播磨の人で、名は雄三、字は起業、号を櫟山と称し、明

治初期の兵庫県神崎郡の郡長として、地域文化の振興を担った漢詩人の文化人で、明治二十二年(1889)には『櫟山詩存』なる漢詩集が公刊されている。日本画家藤本煙津が神崎郡の書記を拝していた時(1886く88)に、文芸の友として交わったのが、漢学者の松岡約齋(柳田国男の父)や、時の神崎郡長であった倉本櫟山らである。

- ・仲野理一郎・・・嘉永三く昭和十一(1850く1936)八十七歳。明治昭和時代前期の水産業者。明治九年(1876)生地の兵庫県淡路島で海参(いりこ・ナマコの加工品)の生産を再興。二十四年(1891)イワシ漁用の改良網と漁船用木貫軸を考案し、三十年(1897)の水産博覧会で進歩一等賞となる。三原郡水産組合長として遠洋漁業を推進した。

- ・献替・・・主君を補佐し、善を勧めて悪を諫めること。
- ・闇藩・・・藩をあげて。

・藤本鉄石・・・文化十三く文久三(1816く63)四十八歳。岡山藩士。本姓は片山、名は真金、字は鑄公、別号は鉄寒士・都門売菜翁。天保十一年(1840)、脱藩して大阪・京都に住み、長沼流軍学を学んだ。同十四年(1843)から諸国を遊歴、旅費は自らの書画で稼いだ。嘉永四年(1851)、再び伏見に住み、私塾碧海寒店を経営、その間著作を行い、文久二年(1862)、真木和泉ら尊攘激派と討幕を計画。翌年(1863)天誅組を組織、挙兵したが惨敗し和歌山藩陣営に斬り込んで戦死した。

- ・古東衝山・・・文政二く元治一(1819く64)四十六歳。

淡路三原郡津井村の庄屋万次郎の子。幼名は震太郎、名は領左衛門、諱は需、別号は琴屋。林滄浪に漢文を学び、天保十二年（1841）庄屋となる。岡田鴨里の門人で女婿。安政五年（1853）と文久一年（1861）の二度にわたって藤本鉄石の来訪を受け、勤皇運動の盟約をし資金を提供、天誅組最大の後援者となり、門弟福浦元吉（1829〜63）を鉄石の従者とした。文久三年（1863）大和義挙に参加、補給と情報係を受け持ち京都に残留したが、八月二十四日、京都において平野国臣とともに逮捕投獄され、翌年（1864）の禁門の変に際し獄中で斬殺された。明治三十六年（1903）正五位を追贈された。

・森田節齋・・文化八〇慶応四（1811〜68）五十八歳。  
奈良五条の生まれ。名は益、字は謙蔵、別号は五条・節翁・愚庵。猪飼敬所・頼山陽・古賀侗庵に学ぶ。昌平黌では安井息軒・塩谷岩陰・野田笛浦らと交流した。数年後京都で頼三樹・梅田雲浜などを指導。幕府ににらまれ倉敷・紀伊・淡路などに移り、最後は剃髪して紀伊の荒見村で歿した。孟子や史記に精通して名高かった。天保十一年（1840）に日柳燕石を訪ね、大きな影響を与えた。歿後は妻の無弦が塾を引き継いで指導した。大正二年（1913）に日下部鳴鶴が頌徳碑を書いた。

・塩谷岩陰・・文化六〇慶応三（1809〜67）五十九歳。  
江戸愛宕生まれ。名は世弘、字は毅侯、別号は九里香園・梅山・晚香廬。文政七年（1824）、昌平黌に入門、また松崎慊堂に学ぶ。その学は古注より新注に復すが、墨守せず文章に優れた。

遠江掛川侯に仕えて職務に勉勵、米艦の来航に際し献策、二〇三の海防論がある。文久二年（1862）、昌平黌の儒官に抜擢され修史に携わった。

・後藤松陰・・寛政九〇元治一（1797〜1864）六十七歳。美濃の人。名は機。字は世張。通称は俊蔵。別号は兼山・春草。頼山陽に学ぶ。篠崎小竹の女婿。始め皆川淇園の門人菱田毅齋に師事。文化十三年（1816）、美濃遊歴中の頼山陽の門人となり、のち山陽の媒酌で篠崎小竹の娘、町子と結婚、江戸掘、のち梶木町で私塾「広葉館」を開いた。

・草場佩川・・天明七〇慶応三（1787〜1867）八十一歳。  
肥前多久村に生まれる。名は瑳助。八歳で「東原座舎」に入學し、十八歳で佐賀本藩の弘道館に進み古賀毅堂に師事し、長崎の江越繡浦に画を学んだ。領主・従い江戸へ出て昌平黌古賀精里の門下となり、尾藤二州ほか、以後各地に菅茶山・頼春水・山陽・篠崎三島・小竹など幅広い人的交流を行なった。古賀侗庵・林述齋の知遇を得て朝鮮通信使会見の一行に選ばれ対馬で通信使と会見をし、この間中井履軒・松崎慊堂の知遇を得た。その後も江木鰐水・広瀬淡窓・旭莊・頼杏坪・支峰・三樹など多数の知己ができ、詩文・書画が拔群で全国的に知られた。多久に戻ってから東原座舎に奉職し後年は弘道館教授になった。大隈重信・副島種臣・江藤新平などの人材を育てた。  
・澤村西坡・・寛政十二〇安政六（1800〜59）六十歳。  
熊本藩士。字は子寛・伯党。通称は武左衛門・宮門。高瀬町奉行を勤める。文政九年（1826）江戸の佐藤一斎の塾に学ぶ。



帰藩後、藩校時習館助教となった。

- ・ 林鶴梁・・・文化三（明治十一）（1806〜78） 七十三歳。  
江戸後期から明治期の儒学者・幕臣。名は長孺、通称は初め鉄蔵のち伊太郎、鶴梁と号し、堂号は十七種素芳堂。上州の人。江戸に出て御家人株を買い幕吏林氏を継ぐ。はじめ遊侠の徒と交わったが悔悟し、長野豊山に師事。甲府徴典館教授ほか諸職を歴任のち嘉永六年（1853）代官に昇進、任地遠州中泉（静岡県磐田市）では地震津波の際に貯蔵庫を開放して領民を救済、奥羽幸生（山形県寒河江市）では銅山開発に努めるなどして功績をあげる。その後納戸頭、新徴組支配、学問所頭取と転任。外艦に対しては藤森天山らと鎖港を主張。維新後は麻布の自宅に門生を教え、終生官仕しなかった。純白を愛し、身辺ことごとく白い花木その他でうめていたという。羽倉簡堂や安井息軒など、実務と文事の均衡のとれた江戸後期特有の代官文人のひとりで、特に文章に秀でた。著作は『鶴梁文鈔』。
- ・ 犀利・・・才知が鋭く、物を見る目が正確であるさま。
- ・ 情誼・・・人ときあう上での人情や誠意。

（平成二十六年三月二十五日

四国大学文学部書道文化学科教授 太田 剛 作成）